

悠久の京を訪ねて Part II Vol.7



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土物により縄文、弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

馬場南遺跡出土の陶製鼓胴

京都府木津川市



鼓

鼓は、和楽器の中で打楽器で、雅楽だけでなく狂言や歌舞伎などで用いられています。

鼓胴はその鼓の本体の部分の名称で、両側に皮を張って手やバチで打ち鳴らします。鼓はもともと日本固有の楽器ではなく、奈良時代に唐楽や呉楽といった外国の舞楽が伝わったときに一緒に伝わったものと考えられています。奈良時代には大きな寺や宮廷に楽団があり、儀式や法会などで演奏していたようです。

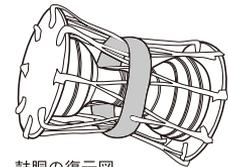
馬場南遺跡出土の陶製鼓胴

さて、鼓は通常木製で、法隆寺や正倉院には奈良時代のものが伝世しています。ところが万葉歌木簡が出土した木津川市馬場南遺跡では、復元長約50cmの陶製の鼓胴が出土しました。この鼓胴は、彩色はなく、とても簡素なものです。陶製の鼓は、日本ではこれまで発掘調査で出土した例がなく、伝世品として正倉院宝物の奈良三彩鼓胴があるのみです。

では、お隣の韓国や中国ではどうなのでしょう

ようか。中国では、古くは唐代の城跡・窯跡や第6代玄宗皇帝の兄李憲のお墓で陶磁器の鼓胴が出土しています。韓国でも10世紀から12世紀頃の窯跡や沈没船から陶磁器の鼓胴が出土しています。鼓は皮をたたいて胴の部分で音を共鳴させる楽器です。けれども陶製の鼓は木製に比べて音の共鳴効果が期待できず実際の演奏で使用されたとは考えにくいものです。

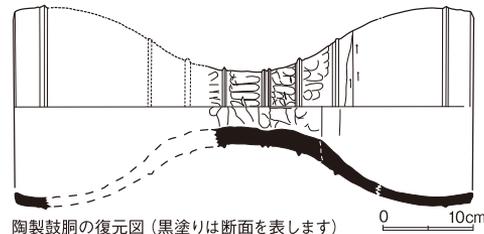
馬場南遺跡は神雄寺と呼ばれる奈良時代の寺院と考えられています。この陶製鼓胴は寺院で行われた様々な儀式と関連があるものではないでしょうか。



鼓胴の復元図



馬場南遺跡出土の陶製鼓胴



陶製鼓胴の復元図 (黒塗りは断面を表します)